

被服平面構成に関する諸問題 (第1報)

大裁女物長着の衣紋について

高月 智志子

Problems concerning Japanese KIMONO-Making (Report 1)

Different Shapes of the Neckband of Women's Kimono

Chishiko TAKATSUKI

The most important way to show a graceful figure in a kimono and its personality is how to adjust a neckband of the kimono.

We have, therefore, observed and analyzed actual changes of the neckband caused by different sizes of opening a kimono at the nape using mannequins.

As a result, we have found the key points to make the neckband look more beautiful and attractive according to your preference.

緒 言

和服姿で最も個性を表現し、美醜を感じさせるのは、衣紋の整え方にある。肩の容姿は、顔の表情ほどに人柄の表れる箇所である¹⁾、と云はれる由縁もここにあるものと思う。

衣紋の整え方には、特に女性の場合、晴れ着、平常着、年齢、職業、好み等によって異なり、同じ長着でも、着装のしかた、仕立て方の違いによって、衣紋の型がどのように変わるのか、衿肩明のあけ方、及びその寸法の違いによる、衣紋の変化を分析し、より美しく、好みの衣紋を創るには、どのような点に留意し、製作すればよいのか、検討を試みたので報告する。

実 験 方 法

1. 実験に用いた人台の寸法 (アダム製)

- | | |
|-----------|---|
| (1) 胸 囲 | 83 cm |
| (2) 頸付根囲り | 36 cm |
| (3) 頸 巾 | イ, 12 cm (左右の頸付根点間の直線距離)
ロ, 11 cm (イより1 cm 上で左右の直線距離)
ハ, 9.6 cm (イより3 cm 上で左右の直線距離) |
| (4) 肩の厚み | 13.5 cm |
| (5) 肩傾斜度 | 右, 28度 左, 24度 |

(6) 頸傾斜度 64度

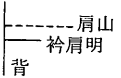
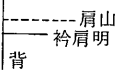
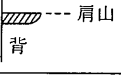
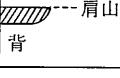
2. 実験用布は、市販の縞木綿を用い、その諸元は、表1の通りである。

表1. 実験材料の諸元

材 料 名	織 維	組 織	厚 さ (mm)	密 度 (本/cm)		重 量 g/cm ²
				タ	テ ヨ コ	
縞 木 綿	綿 100%	平 織	0.13	30	22	0.11

3. 実験衣の条件は表2の通りである。

表2 実験衣の条件

実験衣No.	衿肩明寸法 (cm)	くりこし寸法 (cm)	衿肩明のあけ方
1	8.5	3	
2	10	3	
3	8.5	3	
4	10	3	

衿は撥衿にし、他の寸法は標準寸法を用いた。

4. 着装条件

背面正中線で、衿山の位置を頸椎点より3cm上に定め、これを基準として順次1cmづつ下げた状態で着装。A, B, C, D, E, Fの6種類。

前面は、頸窩点より4.5cm下った位置を左右の衿の打合せ点として定める。

5. 計測項目

- ① 背面正中線で頸から衿山までのあき工合
- ② 着装時の肩山で左右の衿付け間の直線距離
- ③ 背面で左右の衿山間の直線距離
- ④ 衿の傾斜角度（背面正中線及び側面での角度）
- ⑤ 側面で着衣の肩山のずれ状態
- ⑥ 側面で頸と衿山の距離
- ⑦ 側面頸付根点での衿のかぶり（頸付根点から衿山までの距離）
- ⑧ 衿肩明から衿下りの間に生じるたすきじわの状態

結果及び考察

1. 衿肩明のあけ方の違いによる衣紋の状態は、肩山を後にずらせて、くりこしをつけ衿肩明を水平にあけた場合とくりこしを切り取った場合では、同じ衿肩明寸法であっても、着装時の衣紋の状態は、図1、図2のように異なり、その結果は、表3に示す通りである。表の横軸には、計測

高月：被服平面構成に関する諸問題（第1報）

項目を配列し、縦軸には着装条件の種類を示したものである、Aは、後中心で着装時の衿山を頸椎点より3cm上に定めた時、Bは同じく頸椎点より2cm上に定めた時、Cは同じく1cm上に定めた時、Dは、衿山を頸椎点と同位置にした時、Eは、頸椎点より1cm下に定めた時、Fは、頸椎点より2cm下に衿山の位置を定めた時を示すものである。計測値は、同一条件で着装を5回行ない、その平均値を示したものである。

表 3. 条件の異なる衣紋の状態8項目の計測値

(単位 cm)

計測項目 着装条件種類		実験衣 No		1	2	3	4		5	6	7	8
							背面(度)	側面(度)				
A	1	2.2	17.1	10.8	-6	122	+1.1	0	2.8	0.8		
	2	2.0	19.8	14.0	-9	119	+2.6	1.5	1.4	0		
	3	2.6	16.8	8.2	18	132	+0.6	0	3.2	衿によて じわ		
	4	2.9	18.0	9.7	4	126	+1.7	0.4	2.8	0		
B	1	3.5	18.5	11.3	11	128	+0.7	0	2.5	0.6		
	2	3.0	20.6	13.5	6	124	+1.5	0.7	1.4	0		
	3	4.3	18.1	10.0	18	128	-0.6	0	2.3	衿にたて じわ		
	4	3.6	19.1	12.0	6	126	+1.0	0.5	2.0	0		
C	1	4.0	19.4	11.0	21	133	-0.8	0	1.8	0.3		
	2	4.0	21.2	13.5	17	128	+0.5	0	0.6	0		
	3	4.8	18.8	10.6	24	133	-1.0	0	2.3	0		
	4	4.6	19.3	11.6	16	128	+0.5	0	2.0	0		
D	1	5.0	19.8	10.5	31	137	-1.5	0	1.5	0.2		
	2	5.0	21.6	13.5	26	140	-0.3	0	0.5	0		
	3	5.3	18.8	10.2	26	139	-1.4	0	2.0	0		
	4	4.6	20.0	11.2	23	144	-0.3	0	1.5	0		
E	1	5.3	20.7	11.1	32	146	-2.2	0	0.8	0		
	2	5.0	21.7	13.5	31	150	-1.2	0	0.4	0		
	3	5.6	19.7	10.5	39	146	-2.3	0	1.7	0		
	4	5.4	20.7	11.9	37	146	-1.4	0	1.0	0		
F	1	5.5	21.4	11.5	48	148	-2.8	0	0	0		
	2	5.0	22.6	13.0	41	152	-2.2	0	0	0		
	3	5.7	20.1	11.0	44	145	-3.1	0	1.4	0		
	4	5.6	21.5	12.4	39	146	-2.3	0	0.8	0		

注 (+)前へ移行, (-)後ろへ移行

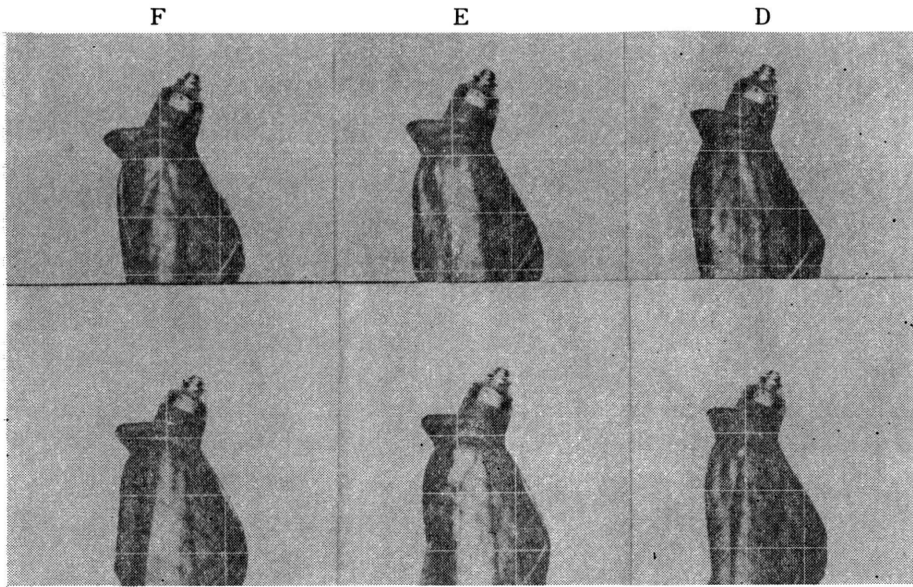


図1. 衿肩明のあけ方の違いによる衣紋の比較（側面）

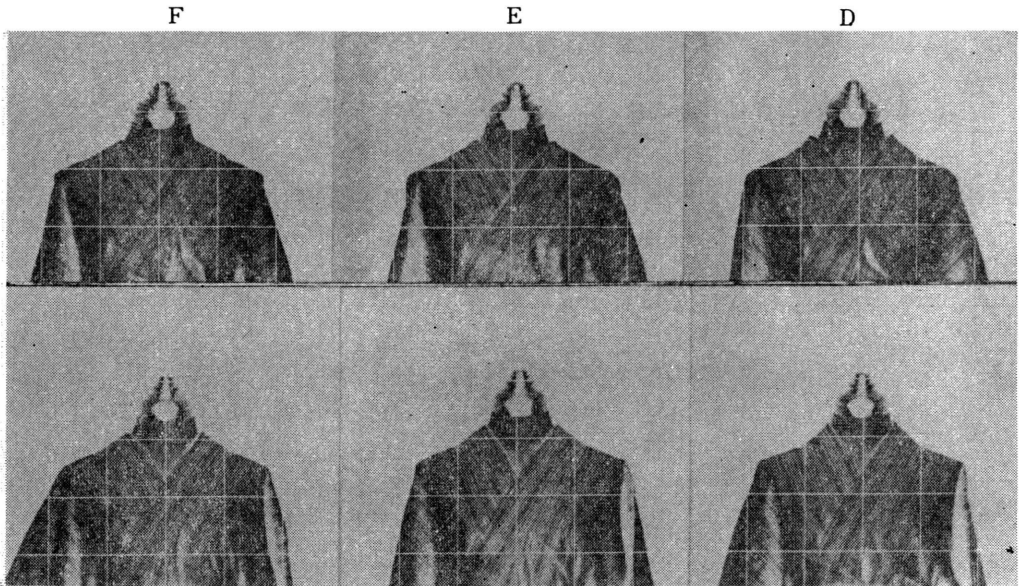


図2. 衿肩明のあけ方の違いによる衣紋の比較（前面）

- 注. 実験衣No.2（衿肩明を水平にあけたもの）
実験衣No.4（衿肩明でくりこしを切り取ったもの）
衿肩明寸法：いずれも10cm
着装条件：D 衿山を頸椎点に定める
E 衿山を頸椎点より1cm下に定める
F 衿山を頸椎点より2cm下に定める

- 5—① 背面正中線で頸から衿山までのあき工合は、前者より（実験衣 1, 2）後者（実験衣 3, 4）の方がより頸から離れやすく、着装時の衿山の位置を頸椎点より高い位置に定めた場合その差は大きくなる。
- 5—② 着装時の肩山で左右の衿肩明距離は、前者の方が、5—①で衿が後に倒れなかつただけ横に広がりやすく、衿肩明寸法が小さい時は、背面で衿山の位置が頸椎点より低い場合、その差は、大となる。しかし、衿肩明寸法が大きい場合は、この逆の状態になった。
- 5—③ 背面で左右の衿山間の間隔は、5—②に比例し、前者が広くなった。
- 5—④ 衿の傾斜は、5—①, 5—②, 5—③に比例し、背面、側面ともに、前者より後者の方がより傾斜角度は大きくなる。したがって、衣紋の型は、前者は、横に広がったU字型になり、後者は、巾の詰ったU字型になる。
- 5—⑤ 肩山の状態は、背面で衿山の位置が高い場合は、前者の方が、前への移動量が大きく、衿山の位置が低くなると、逆に後者の方がより多く後へ移動する。
これは、着装とくりこし量が適切な場合は、長着の肩山と身体の肩山が正しく重なるが、着装の仕方に対し、くりこし寸法が大きい場合は、長着の肩山は、前に移行し、くりこし寸法が小さい場合は肩山は後に移行する。
- 5—⑥ 側面の状態については、頸付根点での頸と衿山との間隙は、衿肩明寸法の小さい時は、いずれも頸に密着するが、衿肩明寸法が大きい場合は、背面で衿山の位置が高い場合、前者の方に隙間ができやすい。
- 5—⑦ 頸付根点での衿のかぶりは、前者の方が浅い。これは、着装時の肩山で左右の衿肩明距離が大きくなると衿が脇に押し出された形になるので、それだけ頸付根点から衿山までの間が短くなるものと考えられる。
- 5—⑧ 衿肩明から衿下りの間にできるたすきじわは、着装時の衿山の位置が高く、衿肩明が小さい場合にできやすい現象で、衣紋を抜いて着装した場合は、衿山の位置が低くなるので、たすきじわは生じない。
2. 衿肩明寸法の違いによる衣紋への影響は、衿肩明のあけ方が同じ方法であっても図 3, 図 4 のように異なる。
- 5—① 背面で頸から衿山までのあき工合は、いずれも衿肩明寸法の小さい方がより多く後に引かれる状態になり、あき工合は、大きくなっている。
- 5—② 肩山で左右の衿付間の距離は、いずれも衿肩明寸法の大きい方が大となる。
- 5—③ 衿山での状態、即ち、背面で左右の衿山間の距離は、5—②に比例し、衿肩明寸法の大きい方が大となる。
- 5—④ 着装時の衿の傾斜は背面正中線では、いずれも衿肩明寸法の小さい方が角度は大きくなる。側面では衿山の位置が頸椎点より高い時は、いずれも衿肩明寸法の小さい方が角度は大きくなるが、衿を抜衣紋にしたときは、肩山で左右の衿付け間の直線距離が広がりやすくなるため、逆に衿肩明寸法の大きい方が衿の傾斜角度は大きくなる。
- 5—⑤ 側面での状態は、衿山の位置が高く、くりこし量、又は、衿肩明寸法が適切でなく、大きい場合には、長着の肩山は前に移行する。したがって、この場合も衿山の位置が高い時は、衿肩明の大きい方がより多く前に移行し、衿を抜衣紋にしたときは、いずれも衿肩明の小さい方がより多く後に移行する。
- 5—⑥ 側面での頸と衿山の距離は、背面で衿山の位置が高く、衿肩明の大きい場合に隙間ができ

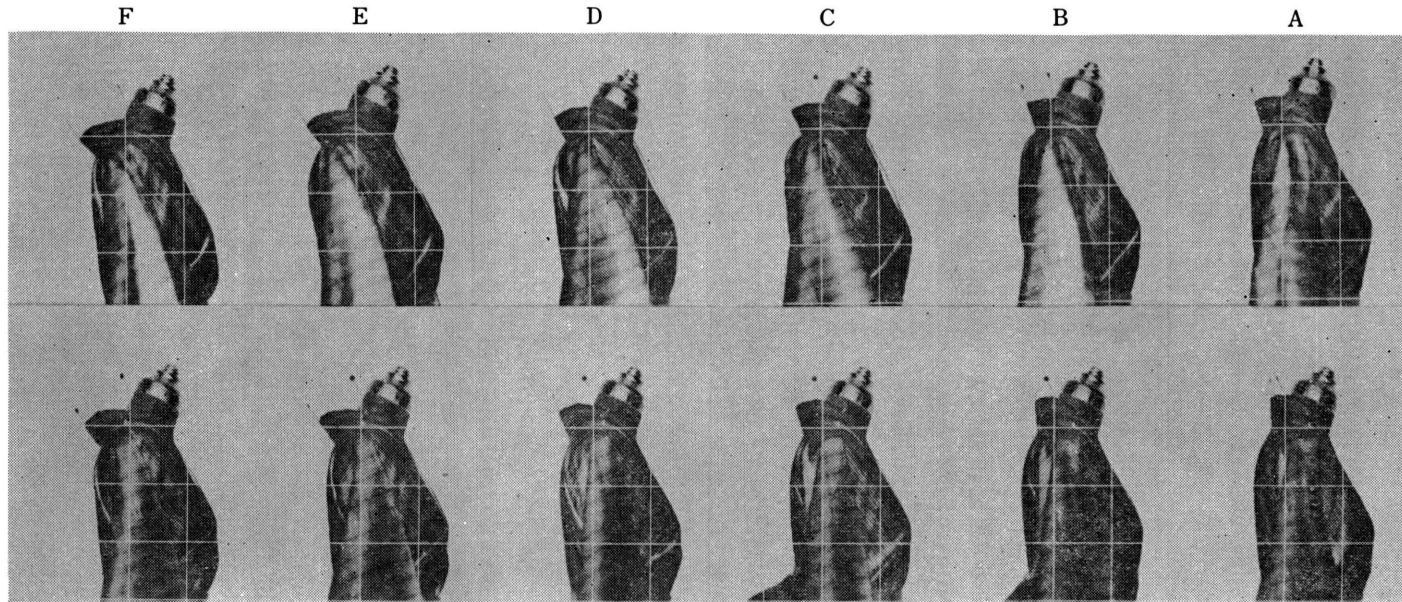


図3. 衿肩明寸法の違いによる衣紋の比較（側面）

実験衣 No. 3

東京家政大学研究紀要第15集

実験衣 No. 4

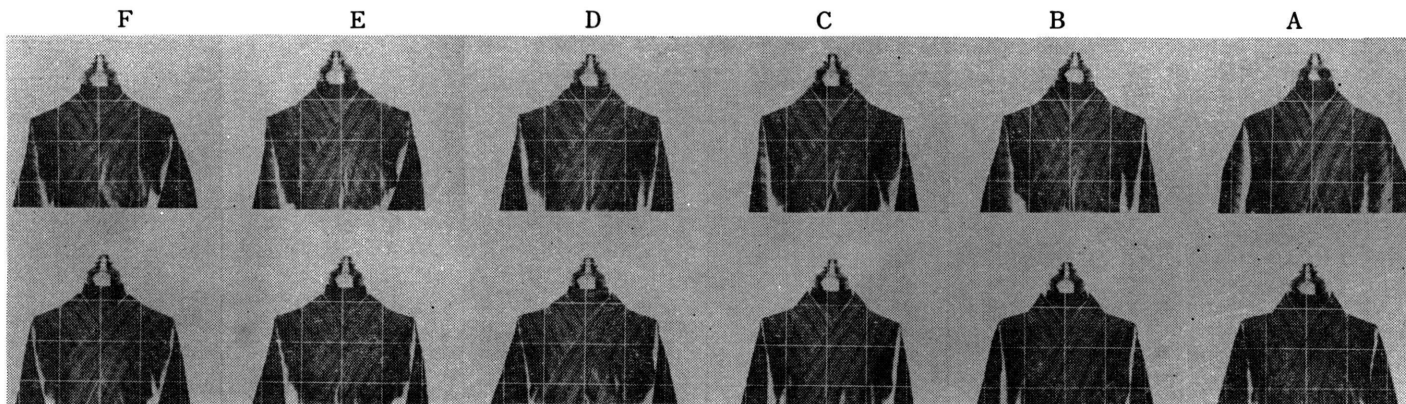


図4. 衿肩明寸法の違いによる衣紋の比較（前面）

注. 実験衣 No.3 衿肩明寸法 8.5cm

実験衣 No.4 衿肩明寸法 10cm

衿肩明のあけ方：いずれもくりこしを切り取る方法

着装条件：A 衿山を頸椎点より 3 cm 上に定める

B 衿山を頸椎点より 2 cm 上に定める

C 衿山を頸椎点より 1 cm 上に定める

D 衿山を頸椎点と同位置に定める

E 衿山を頸椎点より 1 cm 下に定める

F 衿山を頸椎点より 2 cm 下に定める

るが、これは、衿山が後に倒れない時は、衿が横に広がるのでおきる現象である。抜衣紋になると、背面、側面共に衿の傾斜が大きくなるので、衿山は頸に密着しやすくなり、この現象は生じないものと考えられる。

- 5一⑦ 側面頸付根点での衿のかぶり（頸付根点から衿山までの距離）は、いずれの場合も、衿肩明寸法の小さい方が、衿のかぶり量は大きである。これは、衿肩明寸法が小さい場合は、衿が立った状態で頸に密着しやすいため、衿のかぶり量は大きくなるものと考えられる。
- 5一⑧ 前面でのたすきじわは、衿肩明寸法の小さい場合にできやすく、たすきじわにならない時には、衿巾の間でたてじわができる。これは、着用者にとって、衿肩明が小さい時に多くおきる現象であるが、頸と衿肩明の大きさが適切でないため、頸にぴったりとつきすぎ、衿肩明の不足分が脇に押し出され、そのしわよせが、身頃に現れるものと考えられる。身頃に影響のない時には、衿巾の中央に折れたしわが生じる。なを、この現象は、側面で着用者の頸に対し、衿のかぶりが大きい場合、即ち、衿巾の広い場合にもおきるものである。

結 論

衣紋の整え方は、着装目的によって異なるものであるが、一般に若い人の場合では、前面は衿元を詰めてV字型に整え、背面では、衿山が後に倒れすぎないように、ちょうど卵1個が納まる位にあげ、左右の衿山の距離は広がらないよう、巾の詰ったU字型に、側面では、衿山が頸から離れないように整え、中年では、全体にゆったりと大らかに、前面では、衿元を豊かなV字型に合せ、背面、側面共に、衿山が頸に密着しないよう、巾の広いU字型に整えるのが良とされている。しかし衣紋は、着装する人の体型はもとより、個人の好み、美的感覚、又は、生活環境等種々の要素によってきまるものであるが、衿をつめて装う若い人の場合、普通体型の人では、衿肩明のあげ方は、くりこしを切り取る方法が、巾の詰ったU字型に整えやすく、中年では、一般に肩から頸にかけての体型が、若い人とは異なってくるので、豊かな着こなしをするためには、衿が頸に密着しないように、くりこしを肩山から後にずらせ、衿肩明は、水平にあげ、背中心で衿付けの際、身頃の衿付縫い代を多く縫い込み（つけ込みという）衿付線が、ゆるやかな曲線になるように仕立てるのがよく、短頸で怒り肩の人、頸から肩にかけて、肉付きのよい人の場合は、衿肩明、及び、くりこし寸法をいくぶん大き目にし、側面での衿のかぶりが浅くなるように、工夫することが大切である。したがって、くりこしのつけ方は、肩山を後にずらせる方法と、切り取る方法の両者を併用すれば、より着やすく、型のよい衣紋を創り出すことができる。

なお、衣紋を整える重点は、頸椎点を基準に、好みの衿山の位置を定めて着装すれば、衣紋は整えやすく、また、長着の製作に際しても、体型に加えて、着装の容姿を考慮に入れ、適切な採寸、寸法設定を行えば、和服に慣れない若い人達にも容易に着こなすことができるものと考えられる。

終りにのぞみ本論文の校閲を賜った松井和哥元本学教授、木曾山かね教授に対し深く感謝致します。

引 用 文 献

- 1) 上田トメ・山根輝江：東横学園女子短期大学紀要，7，15（1967）